

体・用の事

神谷 昌宏

世阿弥の能楽論集の「至花道」の中に「体・用の事」がある。「一、能に、体・用の事を知るべし。体は花、用は^{にほ}匂ひのごとし。また月と^{げっこう}影のごとし。体をよくよく心得たらば、用もおのづからあるべし。そもそも、能を見る事、知る者は心にて見、知らざるは目にて見るなり。心にて見るところは体なり。目にて見るところは用なり。(略)体・用といふ時は、二つあり。体なき時は、用もあるべからず。さるほどに、用はなきものにて、似すべき宛てがひなきものを、あるものにして似する所は、体にならずや」と説かれている。

柳生新陰流に「神妙剣」がある。「神内に有りて妙外に^{あらわ}顕る。是を神妙と名付くる也。たとへば一本の木に、内に木の神ある故に、花さき匂ひ、みどり立ち、枝葉しげる也。是を妙と云ふ」

小野派一刀流に「心・気・理・機・術、五格一貫」がある。五格の最初に来るのが、心気一如であり「心は実であり、本体本質である。気は用であり、より具体的に変質し、運用すべきものである」とされる。

我々が現代社会に生きてゆく上で、必要以上に外面的なことにとらわれ過ぎ、また惑わされることはないだろうか？上記に云う「用、妙、気」を具体的に示さねば評価されないことが多く、また逆に実体が伴っていないにも関わらず見せかけの「用、妙、気」に惑わされて、影響を受けてしまうような現象である。前者を例えて言えば、「英検の級を持っていないよりは、持っていた方がさも実力が有るように見られる」「ちょっとでも偏差値の高い大学に進学した方が優れているように見られる」等々である。後者の例えは、「華やかな宣伝文句に踊らされて、実際には効果の上がないダイエット商品や、語学学習セットに思わず手を出してしまう」「ウィンドーショッピングのつもりが、陳列の巧妙さについ衝動買いしてしまう」といった現象を言うのである。

しかし真に大切なのは「体・神・心」である。そして言葉こそ違え、これは本質的には同じ所を説いているのである。したがってまずこの「体・神・心」を完全なものにする努力をしなければならない。一刀流極意解説には「心の働きを全うするには、知情意の一致を期さなければならない。明知は万象を照らす鏡である。この鏡に映った姿を清浄な純情をもって果断処決する^{ゆうこん}雄渾な熱意を働かせるのである。この知情意一束一団の心が満ち満ちて、その潜在力が能動の力となって爆発するとき、それは強烈な“気”となり、大事を成し遂げることになる。その“気”こそが豪気と呼ぶものであり、また“生氣”ともいう」とある。

バブルの崩壊以降、学歴社会も崩壊したかに見える。いわゆる見せかけの「用、妙、気」

は通用しない社会となっているのである。世阿弥は「知る者は心にて見、知らざるは目にて見るなり。心にて見るところは体なり。目にて見るところは用なり」という。外面のみを見、また取り繕っている状態がいかにか危ういかを説いている。さらに「体なき時は、用もあるべからず。さるほどに、用はなきものにて、似すべき宛てがひなきものを、あるものにして似する所は、体にならずや（体がなくてはそれから生まれる用も存在するはずがない。だから用は単独には存在しないもので、そのまま似せる方法などないのに、単独に存在するものと誤解して似せたのでは、形なき用がその役者の芸の体になるではないか）」と警告を発している。実体のないものがまことしやかになってしまうことの危険を述べているのである。

しかしながらこの「体・神・心」を養い育ててゆくことは本当に難しく、また不断の努力を強いられることである。まして自分の学歴や、資格に自らが錯覚を起こしてしまうほどあさはかなことはない。自分の「体」をしっかりと自覚し、さらにそれを日々養い育て、その中であって「丹田八九の納め」を自覚して余裕を持ち、「一刀両段」「前後截断」を実践し、また相手の「体」を見抜く「観の目」を持って日々を送る。これが秘訣のようである。

しかしながら、究極の所はさらに上があるようである。

闘戦経 第三章 徹心化骨には「心に^よ因り氣に因る者は未だしなり、心に因らず氣に因らざる者も未だしなり。知りて知を^{たち}有たず、^{おもんばか}慮^{ひそか}って慮を有たず、^し竊に識りて骨と化す。骨と化して識る」とある。この段階に至れる人ははたしてどれくらいいるだろうか。

聖書も「『わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする』と書いてある。知者はどこにいるのか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。この世は自分の知恵によって神を認めるには至らなかった。それは神の知恵にかなっている」と記している。結局我々はいくら努力をしてもあらゆることを体得し、あらゆる知識をもつことはできないことに気づきなさい、と言うのである。これまでに得た知識はもちろん自分の中に生きているのであるが、しかし知らないことの方が圧倒的に多いことに気づいたとき、つまり自分の未熟さと弱さを自覚することができたとき、正しい人間の状態が生まれると言うのである。人間本来の姿は神が創造された姿であり、また状態であるといえる。我々はそれに気づいたとき、創造主に依り頼む心境となり、信仰を受け入れ、またその事によって平安を与えられるのである。